

## 講演会「ワーキングメモリと近未来社会」 (第21回グローバルCOE共催講演会：ユニットA)

---

グローバルCOE共催の講演会を以下のように開催します。申し込み不要、入場無料です。

- ・日時：2010年3月6日(土) 15時30分～17時30分
- ・場所：京都大学文学部新館第7講義室  
[http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/access/campus/map6r\\_y.htm](http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/access/campus/map6r_y.htm)
- ・講演者：苅阪直行(京都大学大学院文学研究科)
- ・演題：第7回日本ワーキングメモリ学会大会特別講演  
「ワーキングメモリと近未来社会」
- ・お問合せ：大塚結喜 [yotsuka@bun.kyoto-u.ac.jp](mailto:yotsuka@bun.kyoto-u.ac.jp) (@が全角なのでコピー&ペーストするときには注意してください)

### 講演要旨

ワーキングメモリ(working memory)は注意の時空間的かつ多重的なスイッチングにより制御されている。その意味でワーキングメモリとはワーキングアテンション(working attention)であるともいえる。ワーキングアテンションは社会も含めた環境へのフレキシブルな適応の担い手でもあり、これによってヒトは進化や成長を遂げてきた。とくに、最も成熟が遅く、最も衰退が早いといわれる前頭前野(prefrontal cortex: PFC)と頭頂葉などとリンクした脳の領域がワーキングアテンションにかかわるといわれる。この領域は40億年の脳の進化の最前線にあり、現在進行形で進化を先導しつつあるといえる。ワーキングアテンションは最適適応のためのプランをたて、それを実行に移すための準備を行う役割を担うが、これを実現するためにバッファとして作動するのがワーキングメモリである。

ここ十年ほど大学生のワーキングメモリの容量の個人差を観察してきたが、リーディングスパンテストなどで測ったワーキングメモリの成績が著しく低下していることがわかってきた。携帯電話をはじめとする情報機器がもつ、使い勝手のよい外部記憶の増加が内部バッファとしての「脳のメモ帳」の機能劣化をもたらしていることが考えられ、教育上もシリアスな問題になりつつあるというのが筆者の印象である。しかも、これは未来の情報化社会がワーキングメモリの退化を促す可能性をもつという点で重要である。

高度情報化社会が進展するほどワーキングアテンションへのムダな過負荷が生じ、ワーキングメモリの機能低下が促進されるという構造が見えてくる。ヒトの知性の進化を先導し、創造的な思考を促し、適応的な社会脳を発達させてきたワーキングメモリの危機が未来社会に落としつつある影について考えてみたい。